

QEを終えて



LD2

Akibiro UDAGAWA

宇田川 瑛弘

本学でQEが実施されるのは今年度が初めてであったため、要求される研究・発表の質から発表会場の雰囲気に至るまでなにもかもが未知数でした。さらに、11人いる1期生のなかで僭越ながらトップバッターを務めることになったこともあり、必要以上の重圧を感じながら本番に臨みました。

副指導教員として審査をしてくださった二人の先生方からは、研究内容に関係する基礎専門知識について、学術的立場と社会への還元を見据えた立場という異なる視点から数多くの質問・コメントをいただきました。本プログラムで育成する力として掲げられている「俯瞰力」も試されているのだと思いながら必死に答えているうちに、1時間が経過していました。

また、学術論文を1報投稿することが受験条件として課されていることによって、早い時期から研究内容を論文という形にまとめることを意識できたため、研究を進めるモチベーションを維持しやすかったと思います。さらには、投稿する論文の質を向上させるために、権威ある学術誌に過去に受理された同分野の論文を読み漁り、自分の研究の立ち位置を明確化するという経験を修士2年(LD2)の間にできたことは、非常に有意義だったと感じており、論文投稿の義務は大変良い制度だと思います。

QEの経験も糧にして、社会に通用しうる人材に成長すべく、今後のカリキュラムや研究活動により一層励んでいきます。



LD2

Hiroshi TOKUE

徳江 洋

私の所属する研究室では皆の前で成果を報告し、質疑応答を通して議論する機会が多いため、口頭発表形式のQEにも自信を持って臨みました。しかし、より深く原理に踏み込んだ指摘や、研究室内の議論とは異なる視点での企業の方からの質問に対してうまく対応することが出来ずに慌ててしまい、力不足を痛感しました。先生方からのご指摘により、研究内容の課題だけでなく、研究推進にあたって意識の甘い部分があることも改めて認識することができました。一方で、成果の中での魅力的な点や、今後の研究計画において追究することで面白味が出てくると期待される点を新しく見出すこともできました。

QE受験要件の一つが論文投稿でしたが、これまでの研究を振り返り、一つの形としてまとめる良い機会となりました。論文執筆の過程で、研究の位置付けや主張点を確認できたことは、QEでのより深い議論に結び付いたものと思います。

これまで三年間の研究を見直して発表し、今後の計画について議論、更に、最後に様々な見地から講評まで頂けたQEは、次の研究展開にもつながる大変有意義な試験でした。

プログラム担当者／先進理工学専攻 主任

Toru ASAHI

朝日 透

12月9日より6日間かけて、1期生11名のQualify Examination (QE)を実施しました。本学でQEが実施されたことはこれまでになく、初めての試みでした。本プログラムでは将来グローバルに活躍しうる研究者育成を掲げており、QEを通し世界水準の質の保証をはかります。QEでは単にこれまでの研究成果を評価するにとどまらず、専門知識の理解度および研究テーマに関わる課題をどう解決するかなどを審査し、さらに社会との関連性の中で自分の研究をどう捉えるかなど、高度産業人材としての素地も評価しました。

学生はこれまで取組んできた研究の成果と今後の研究プロポーザルについて発表し、それに対し指導教員および専門の異なる副指導教員に加え、企業から本プログラムに協力してくださっているコンサルティング教員(JX日鉱日石エネルギー(株)、(株)日立製作所、三菱ガス化学(株)など)により複数指導をいたしました。各教員からは、厳しい質問やコメントも投げかけられましたが、学生たちは習得した論理構成力やコミュニケーションスキルを駆使し、粘り強く、時に情熱的に回答していました。

審査員に正確に説明できていなかったり今後の研究目的や研究計画などに改善の余地がある学生もいましたが、総じて好評価を得ることができました。今回のQEにて審査員から得た助言を生かし、学生同士で切磋琢磨しあい、これからの研究活動になお一層励むことを期待しています。